

の場合あえていえば、コモンズの管理という政策の方向に基本的に共感しつつ、コモンズをめぐる住民の交渉を、「有限・有益な資源を平和裏に、そして持続的に利用しようとする地域住民の潜在的な能力（p. 8）」として生かすには何が必要かということになるのかもしれない。しかし、本書の分析は、そのような疑問に必ずしも十分に答えているとはいえない。たとえば、シウィング村の事例で、県行政が介入の際にとった姿勢は、事態の行方を決定的に左右する要因であったはずである。県の判断は、本書で述べるように住民の「交渉術（p. 197）」の成果としてなされる場合もあるが、行政の方針を貫徹するためになされる場合もある。何が両者を分けるのであろうか。

アジアや日本の事例から考えると、現在のコモンズ管理の主な論点は、住民参加によって「政府の失敗」をいかに防ぐかという従来の議論から、住民同士では解決の難しい「コミュニティの失敗」に対してどのような「協治」の道筋がありうるかという方向に移りつつあるように思える。つまり、いかにコモンズ論を超えるかが重要になっているのである。本書がコモンズ論の文脈でより意義のある主張を展開できるとすれば、ひとつにはそのような方向があるかもしれない。また、住民によって再定義された「新しいコモンズ」が、資源管理上、あるいは人々の生活の持続的発展にとってどのようなレジームであり、どうあるべきなのかという問いも重要である。本書の自然科学的な分析がそのような方面で生きてくれば、文理の融合した立体的な

コモンズ論を構築できるかもしれない。

地域の実態をモノグラフとして描く際に、その内容からある論の文脈で何がいえるのか、頭を悩ませることがよくある。地域の詳細な記述と鋭い議論との間には、どうしても隔たりが生じてしまいがちである。両者をつなげるのは容易なことではないが、地域研究の新たな地平を開くためには必要なことではないだろうか。

遠藤聡子。『パーニュの文化誌—現代西
アフリカ女性のファッションが語る独自
性』昭和堂、2013年、240 p.

金谷美和*

本著のタイトルにある「パーニュ」とは、「工場生産の更紗」のことである。パーニュは、幅約1メートル、長さ5.4メートルで販売され、3等分した大きさが巻き布になるという。西アフリカの女性は、パーニュを巻き布として身にまったり、パーニュで仕立てた衣服を着用している。著者の研究の発端は、初めて西アフリカを訪れた際、女性たちが着用していた色鮮やかで装飾の凝らされた衣服に驚いたことにある。

著者は、「西アフリカの女性たちの衣服が、なぜこのように独特なのか」という問いをたてた。著者の考える現代の衣服文化の傾向は、「世界中の服装が洋服に統一されたかにみえるほど顕著な近代化、西欧化」であり、「西欧化がすすむ現代の衣服文化において、

* 国立民族学博物館

人びとが身につけているのは世界的に広まる洋服か、いまだ駆逐されずに残っている民族服」のどちらかである。そのような現代の衣服の現状に、西アフリカの女性たちの衣服はあてはまらなかった。つまり、西アフリカ女性のあいだで着用されている衣服は、洋服でもなく、また民族服でもない独自の衣服であることに著者は気づき、なぜこのような衣服が着用されているのかについて明らかにしようとしたのである。著者は、フィールドをブルキナファソの一地方都市ボボジュラソとその周辺村において調査を行ないながら、西アフリカ全域を対象に女性の衣服文化について論じている。

評者はアフリカ研究者ではない。アフリカの染織品や衣服文化に対する学術的関心は、評者の研究対象であるインド西部との関連からもたらされている。インド西部から、アフリカ東部に染織品が輸出され、衣服文化に影響を与えてきたことから双方のモノ、人の交流に関心をもってきた。また、インド更紗やジャワ更紗の技術やデザインが、機械捺染による「プリント更紗」（パーニュもそのひとつである）として世界展開してきた歴史研究も行ない、著者も引用している国立民族学博物館特別展覧会『更紗今昔物語』に携わった。したがって、比較研究の観点から本著の評を行ないたいと考える。

まず、本著について紹介し、さらにいくつかの論点に絞って、論じたい。

パーニュを用いた衣服が支持される理由を、著者は次のようにまとめている。布は、西アフリカで富として重要視されていた

め、パーニュは、布として流通する点で在来服飾文化と親和性があり、広く受け入れられている。また、安価に入手しやすいにもかかわらず晴れ着にも使えること、加工しやすいこと、他の布にはない仕立てデザインと多様さという新しい要素を加えた服地であること、デザインのバリエーションに流行があつて短期的に更新されること、多様な形を実現できる柔軟さと絶え間なく移り変わる一時性を備えている点が、洋服に対して競争力をもち普及しているという。

さらに、世界的な衣服文化の西欧化、あるいは文化のグローバル化傾向がみられるなかで、西アフリカでは個別のローカルな場にある衣服文化が抹殺されるのではなく、むしろパーニュを用いた衣服という一地域の衣服文化が独自性を保っていることの重要性を著者は指摘している。そして、このような独自の衣服文化が生じたふたつの背景について述べている。

ひとつは、西欧的近代文化との接触以前に、すでに自分たちの側にもそれに対抗するような超民族レベルの文化的伝統ができていたために、異なる文化を無抵抗に受け入れるのではなく、自文化を保ちながらそこに組み入れることができたということである。パーニュやその起源である更紗、イスラームや西欧の文化を取り入れた衣服の様式は、布を加工した衣服が一般に広まっていなかった西アフリカにおいて広く受け入れられ、またこれらが受け入れられたのちの植民地支配期における西欧文化との接触においては、これらの服地や衣服様式があつたため

に、西欧の衣服に取って代わられることがなかったというのである。

ふたつめは、パーニュを用いた衣服が時代の要請に応じて変化する特質をもつこと、そしてそのような衣服を維持できる環境や仕組みがあることだと述べる。パーニュという服地が入手しやすく、また衣服生産を支える小規模な仕立業が個別に衣服製作を行なうというシステムが確立していること、流行を生み出す「モデル写真」の西アフリカ都市間の流通システムが確立していること、などが該当する。

つまり、「アイデンティティの拠り所となる文化があり、民族のレベルを超えて共有されていること、その文化的要素が時代の要請に応じて変化する特質をもつこと、地域にそのような衣服を維持できる環境や仕組みがあること、これらの点が、ある地域の文化が、西欧文化、グローバル化する世界においてなお独自性を保つ背景として指摘できるのではないか」と著者は結論づけている。

では次に、いくつかの論点に絞って論じたい。

まず、著者が冒頭にたてた「なぜ西アフリカ女性は、洋服でもなく、民族服でもない独自の衣服を着用しているのか」という問いに本書は十分に答えているのか検討したい。

西欧的近代文化との接触の以前に、すでに対抗しうるような超民族レベルの衣服文化ができあがっていたために、洋服を無抵抗に受け入れるのではなく、自文化を保ちながらそこに組み入れ、パーニュで仕立てた衣服という独自の衣服文化を構築することができたと

いう著者の考察には説得力があると評者は考える。

ただ、ここで気になるのが、著者が本著の題目にも用いている「独自性」という言葉である。パーニュにより仕立てられた衣服が、何と対比したときに「独自性」があるといえるのかが曖昧なまま、この言葉が用いられていて、しばしば評者は読み進めるときに困難を感じた。近年の装いに関する研究は、布を素材とする衣服だけが対象なのではない。Dress（身体にまとうもの）の定義は、*assemblage of body modifications and/or supplements*（身体に変形や・あるいは補足をすることの組み合わせ）[Eicher and Roach-Higgins 1992]であり、dressには、布で作った衣服、帽子、はきものだけでなく、髪型、装飾品、化粧、香水、身体加工（入墨、ボディ・ピアス、整形）なども含まれる。この定義に従うと、裸体に装飾品をつけるという西アフリカの諸民族が行っていた慣習は、dress cultureに含まれる。つまり、西アフリカの各民族の従来の身体に何かをまとうという文化はすでに消滅していて、「独自性」はすでに失われてしまっている、と理解することもできるのである。

あるいは、パーニュで仕立てた衣服の「独自性」が、民族服でもなく洋服でもない衣服のありようを指して述べているのであれば、そのような事例は他にもみることができる。

ジャワ更紗のデザインを取り込んだプリント更紗は、インドネシアの各島、ベトナムを除く東南アジア大陸部やネパールにおいて、従来それらの地域で着用されてきた女性の腰

布や筒型スカートに置き換わるかたちで着用されるようになっていく [吉本 2006: 54].

このような現象は、洋服に代替されず、従来それらの地域や民族のあいだで着用されてきた腰布や筒型スカートという衣服の形態が維持されているという点では、衣服文化の「独自性」が維持されているとみえるかもしれない。しかし視点を変えれば、在来の織りや染めの技術によって製造されてきた腰布や筒型スカートが消失し、地域や民族の違いを無化するような均質化された衣服文化に覆われてしまったともいえる。

評者の調査地であるインドにおいても、同様の現象が生じている。インドでは、既婚女性の多くがサリーを着用する。大都市以外では女性の洋服姿は少なく、一見してインドでは衣服文化の独自性が維持されているようにみえる。しかし、実際にはインド西部のように従来サリーを着用してこなかった地域があり、サリー着用地域であっても、各地域や民族集団ごとに染織技法が異なるサリーが存在し、サイズや身体へのまとい方が異なっていた。それが現在では、規格化されたサイズの生地プリントによって色柄をつけたサリーが圧倒的に多く、サリーを着用していなかった地域や民族を含めてインド全域で着用されるようになっていく。洋服に駆逐されていないという点で、インドの独自性を保っているといえるが、地域性、民族性に関しては、多様性は失われ、均一化された衣服文化に覆われるようになっていくともいえるのだ。

東南アジアや南アジアの衣服の状況と比較するとき、プリント更紗という衣服の素材の

重要性が浮かび上がってくる。つまり、プリント更紗とは、近代以降のグローバルなモノや情報の流通が発達した時代に、世界各地において地域や民族の基層の衣服文化に入り込むかたちで新たな衣服文化を創出した素材だといえるのである。そして、パーニュやパーニュで仕立てられた衣服は、そのようなプリント更紗が素材となって作られた衣服文化のひとつとして位置づけられると評者は考えている。西アフリカ女性の着用するパーニュを、グローバルに生じている衣服文化の創出のひとつとして位置づけるとき、パーニュの衣服文化の誕生について詳述した本著は、今後も参照されるべき研究であると評者は考える。

次に、パーニュで仕立てた衣服という独自の衣服文化が存在するには、地域にそのような衣服を維持できる環境や仕組み、つまり小規模な仕立屋が個々の衣服を製造するシステムや他の都市の流行を共有し取り入れる「モデル写真」というシステムがあることだという著者の考察について検討したい。

仕立屋による製造や「モデル写真」のシステムが確立し、機能しているのは、それを顧客である女性たちが求めているからでもある。パーニュで仕立てられた衣服を支えるシステムは、パーニュで仕立てられた衣服を求める女性たちと、産業との双方向的な働きかけによって成立しているといえるだろう。このとき女性側からの働きかけを軽視すべきではない。たとえば、パーニュの選択は女性自身によってなされているとあるが、女性たちが、生地を選ぶときに何を基準にしているの

かについて本著では言及がなかった。パーニュの色柄には流行がある。パーニュの製造会社は、定期的にパーニュの新しいデザインを発表している。過去に販売されたデザインは保管され、時代を経て繰り返し活用され、それをもとにデザイナーにより新しいデザインが開発されている。消費者である女性の生地を選択が、流行をどのように動かし、それが製造会社のデザイン開発にどのようにフィードバックされているのかが明らかにできれば、大変興味深い。

評者は著者に、なぜパーニュで仕立てた衣服が女性たちの心をつかんだのか、という点について追求して欲しかった。著者は、洋服でない衣服文化がこの地域に根づいた背景を明らかにしているが、それがなぜパーニュだったのかということは依然として不明だからである。色鮮やかでデザインが多様、流行に沿っていることは、衣服として十分魅力的であることは想像できるが、ただ単にそれだけだったのだろうか？

パーニュで仕立てられた衣服は、まさに現代を生きる西アフリカの女性の「生」にフィットする衣服であったはずだ。衣服は肌にまとうものであり、まとうことで身体と身体の外にひろがる環境とのあいだに境界線をつくる。衣服は私とは誰か、どのような人間なのかということを表現する媒体である。女性たちにとって、身体観やアイデンティティ、ジェンダー、美的価値などを満たすような衣服だったはずである。著者が論じているような、政治的経済的な状況だけが、女性たちにパーニュを選び取らせているとは思えない。

著者が述べる「女性自身の堂々とした姿やしやれに対する意識の高さ」は、それだけでは説明がつかないからである。

以上論点を定めて、評論をすすめてきた。本著で書かれていないことについて「読みたかった」と述べるのはないものねだりであることは重々承知のうえである。今後著者が研究を重ねられたら、ぜひその成果を読みたい。評者のラブコールだと理解して頂けたら幸いである。

引用文献

- Eicher, J.B. and M.E. Roach-Higgins 1992. Definition and Classification of Dress: Implications for Analysis of Gender Roles. In Ruth Barnes and Joanne B. Eicher eds., *Dress and Gender: Making and Meaning in Cultural Context*. Oxford: BERG, pp. 8-28.
- 吉本 忍, 2006, 「アジアのプリント更紗」『更紗今昔物語』国立民族学博物館, 54-57.

東長 靖, 『イスラームとスーフィズム—神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会, 2013年, 314 p.

赤堀雅幸 *

日本のスーフィズム研究を牽引し、世界的にもこの分野の専門家として知られる著者の手になる本書は、二重の意味で地図としての役割を果たす。

その第1の意味は、過去四半世紀余りに生み出された著者の論攷の相互の位置づけを

* 上智大学外国語学部